

# 永青文庫本「手鑑」中の連歌作品について

岩 下 紀 之

近世初期に簇出した各種手鑑に連歌の切れが収録されていることは、特に珍しいことではない。細川家永青文庫叢刊の別巻として刊行された「手鑑」には、とりわけ連歌作品、つまり懐紙の切れ、句集の切れ等が多く見出される。本稿では、この刊本に基づき、初歩的な翻字と出典の究明を試みたが、伝承筆者については関心を持つものではない。ただ今後の調査のための覚書としておきたい。なお各句の上には私意によって記号を付して論ずることがある。また各切れの番号は、永青文庫叢刊編者による整理番号を踏襲している。

## 17 後土御門院

【うちわひあかす夜はのさひしさ

A 霜おもき秋のころもに月深て

下庵はちれる木のはを枕にて

B もるをみるさへすこか小山田

後のくれまたは月にも成つへし

C 秋ふる雨のむら雲のやま

露ちるなみのとりの一つれ

D ほしあひにわたせる橋の天川

雲井にかりのともなへる声

E あまつかせいまを秋とやわたるらん

このうちBは、七賢時代連歌句集所収「宗砌発句并付句抜書」に、

三六三 下庵ハちれる木葉を枕とて

三六四 守をみるさへす子かをやま田

とあって、前句に一字異同がある。

Cも、同書所収「宗砌句」に、

三六二 後のくれまで八月にも成ぬへし

三六三 秋ふる雨のむら雲のやま

とあり、これは前句に二字の異同がある。さてこの二句の共有句を根

扱として、この切れは宗砌の句集と見ることができ。なお出典としてあげた二書は、それぞれ別に伝来した句集であるが、同書の解説によれば、いずれも宗砌の最晩年の成立と考えられる。この切れが、また別に宗砌のその頃の活動を伝えるものとする面白。またこの五句はいずれも秋の句であるから、部類された句集であったことも想像される。それはそれとして、宗砌句集の一断片として興味深いものである。

34 近衛殿信尹公

「雲の浪わくる氷のわたち哉

暮山雪漸晴」

この切れについては手がかりがない。和漢の発句と脇の部分であるが、発句を一行書にしている形式から、これが原懐紙を直接切断した切れでないことは明白である。

51 青蓮院殿尊朝

「ねぬよの風に

しくれふる空

宿もなく暮せる

のへは袖さえて  
なをわけすてぬ  
道のさ、はら  
うつせみの声をり  
はゆる木隠に  
ぬれてす、しき  
露ははらし」

独吟の連歌懐紙の切れと思われるが、手がかりがない。

61 聖護院殿道興

「滑園人窈窕

胡地馬跳踉

とをき野の草ふみ

からす小鷹かり

ゆふ山もとに

霜まよふ妹」

この切れも漢和、または和漢の断片としかわからない。これも独吟であろう。

「裙紅 莎茂 廟 海住山大納言

盃 靨 菊 開庭 中院一位

九重やめくれる

秋の数くんに 近衛前関白

いく夜みきとは

月も知らん 内大臣

うくつらき人こそ

身をはなきになせ 右大臣

うらみつゝすむ

おなし世の中」

和漢、又は漢和の懐紙の断片である。六句の切れであるが、人名によりある程度、興行の時を限定することができる。中院家で一位に叙せられた人物は、十輪院内府通秀のみであるから、彼の叙位された文明十三年正月七日以降のこととなる。この頃の人物にあたってみると、海住山高清の大納言就任は文明十二年、長享二年に薨ずる。近衛政家は、関白就任文明十一年、文明十五年辞職後は再任していない。したがって、近衛政家の関白辞任した文明十五年から、海住山高清死去の長享二年に至る、約六年間の作ということになる。同じような連衆による和漢としては、文明十五年八月七日のものが、内閣文庫本賜盧拾

永青文庫本「手鑑」中の連歌作品について（岩下紀之）

葉に収められている。

106 菊亭殿晴季公

「この比の野山に

しるき虫の声 長

しれかしおなし

誰も露の身 雪

めにちかくいとふを

見つゝ、過す世に 碩」

連歌懐紙の切れである。出典は伊庭千句第九、二裏十一句から十三句で、連衆は宗長、聴雪すなわち三条西実隆、宗碩の三人である。大永四年のこの千句は、神宮文庫蔵の荒木田守武筆の古写本等が伝来しているが、この切れも室町写本として貴重なものである。連歌集書本では、宗長の句「しけき虫の声」となっている。

152 連哥師紹巴門弟素丹

素丹  
二九日慶長十五

越てしも身には積らぬ年もかな」

「顕伝明名録」に素丹の項がある。

肥後国宇土住人桜井氏 紹巴門弟

「連歌史論考」には、天正三年五月七日、肥後国加悦式部少輔入道素丹興行の、紹巴一座百韻が記載され、「俳諧大辞典」には、素丹発句集の項目がある。この切れは慶長十五年の作であるから、天正三年に既に紹巴を迎えて連歌興行をしていた人物が、それより三十五年後まで生存していたことになり、かなり長命の人であったようである。この発句の内容から見てもそのように感じられる。

208 時宗寛阿

『かみすちはなにのかつらそう□めの木 所

さくるひけ籠にかゝる袖のは 好

家つとに其色みゆるこゝろさし 為』

この切れも手がかりがない。作者名の一字名も不明である。伝称筆者の覚阿については、「顕伝明名録」に八人あがっており、室町後期の人物と思われるものも三人ある。

一、越前国時宗法師東北院（波）

二、堺 金光寺 肖柏時代

三、極楽寺「上人」「時宗」「波」

というのであるが、該当者がいるのかどうかもわからない。なお、こ

の注記「波」というのは、「新撰菟玖波集」にありといふので、連歌に無縁の人たちではないのである。

247 細川殿元常

『かへるきこりの

こゑかすか也 藤中納言

笛竹のうた、

かなしむ一ふしに 行応

つれなきもはた

なひかさらめや 元常

いのるてふしるし

あれなとゆふかけて清誉』

連歌懐紙の切れである。細川元常は和泉守護で幽齋の養父であるから、細川家の先祖として取り扱われているのであろう。彼の連歌活動としては、天文七年二月四日の何路百韻で、周桂の十四句に次ぎ十三句を詠んでいること、「言継卿記」によって、天文十四年二月廿五日の細川家千句に出座していることなどが知られる。天文二十三年六月十六日に死去している。

清誉は当時の連歌数寄の僧であって、「連歌史論考」によれば、「永禄五年に島津貴久の招きで鹿兒島の不断光院に移り、その開山となつ

「大人である」ことのほか、天文十六年から天正九年に至る断続的な百韻出座が確認される。

他の二名については不明であるが、この二名の活動から見て、この連歌は天文十年代の興行の可能性が高いと思われる。

### 281 連歌師心敬

「A旅の道ひとり／＼に身はなりて

同於妙国寺

B朝しほは楸かせふく浜辺かな

しはしこ、ろそ空にまよへる

C袖までは花をおとさて吹風に

心ををくる老そかなしき

D待ゆふへこぬ夜の中に年を経て

Eなをさりのたまつさならはとめしとや」

これは心敬句集の切れと思われる。Bの句は、「心敬作品集」によると、「芝草句内発句」四三六、「心玉集拾遺」一七三五、「芝草内連歌合」二五九四と三個所に見え、心敬の自信作であった。さらに、「竹林抄」三二七〇、「新撰菟玖波集」三七六九にも採られている。

Cは「苔庭」の面白鉢、二〇二三―二〇二四、「吾妻辺云捨」七―八であって、両書では、共に前句「こ、ろそしはし空にまよへる」と

永青文庫本「手鑑」中の連歌作品について（岩下紀之）

なっている。

Eは「竹林抄」二〇二〇の前句であって、

なをさりの玉章ならはとめしとや

たひのつてをもちそくはやふね

というのが完全な形で、勿論心敬の句になっている。

このように心敬作の明証が三句にわたって判明するので、この切れが心敬の一句集からの断片であることは疑いない。さらに、共通句を収録している心敬句集は、いずれも彼の関東下向のころの編であって、この切れがそのころの心敬の書きとめというような第一的資料であることも、充分に考え得るのである。

### 283 連歌師宗砌

「なに、□せまし

これやこのきみか

代をのみいはる哥

わかなつむなる

かすかの、はら

今幾日花に

待見む春さむし

人まれにして

かすむ山さと」

独吟百韻の懐紙の切れと思われるが、今のところ手がかりがない。

284 連哥師宗長

「はなれそまくら

はつ膺もなけ 牡丹花

日くるれはあまの

小船も山のかけ 同

みそれふりたえ

雲かへる見ゆ 宗碩

なき空やあはれ

玉ゆらかけるらむ 同

この切れは、永正十年二月十六日に興行された、牡丹花宗碩両吟百韻の、三表二句から五句である。この百韻は天理本、京大平松本等、かなり流布した作品で、桂宮本叢書にも翻刻されている。同書とこの切れを比較してみると、全く異同がない。

285 連哥師行助法印

「あらはれのこる

松はらの路 専順

磯つたひ舟ひく

あまのこゑはして 義直

そことも見えす

かすむうらく 桐

浪にさく花や

うしほにくもる覧 藤

いつくの春も

けしきある比 □

専順が一座している懐紙の切れとして貴重なものである。連衆中の桐と藤の一字名については、「満濟准后日記」永享二年六月廿九日条に、

御連歌字桐字今日初被遊之、撰政藤字也

とあって、足利義教、二条持基がこの字を用いた明証がある。さらに、両者の子の代である足利義政、二条持通も、同じく桐、藤を一字名としていることは、寛正五年四月二十八日の將軍家の百韻等によって明らかである。専順の活躍期から考えて、義政・持通と見る方がよいと思う。將軍、撰闋家とが同座した晴の連歌である。他の連衆については、難読であるけれども、「義直」と読めば一色義直が幕臣として出座していたかもしれない。切れの最後の行の一字名も、もし「聖」と読むなら聖護院等が考えられる。

287 堺連哥師宗柳

【夢想之連歌】

生そふや竹の

林の嶋かくれ 御

かすみて松の

遠きま砂地 宗味

鶴あそふ朝けに

春の霜とけて 宗柳

夢想連歌懐紙の第三句までの切れである。第三の作者で、伝称筆者の宗柳については、「連歌史論考」第十一章・二・堺の連歌と主要作家、に記述がある。それによって、この連歌は天正頃の作品と推定される。脇句作者宗味は未詳である。

289 連哥宗匠兼載

【賦朝何連歌】

露にたに紅葉の

いかにはつ時雨 宗長

しもをくまでの

なか月のくれ

永青文庫本「手鑑」中の連歌作品について（岩下紀之）

この切れは、宗長作の長享年間の独吟太神宮法楽千句の第七、冒頭の二句である。この千句はかなり流布した作品ではあるが、後の大永二年の宗長宗碩両吟伊勢千句と違って古写本にめぐまれない、そのため正確な興行日時も判明していない。この切れはおそらく現在最古の写本と思われる。本文は連歌集書本と比較して仮字遣いの他は異なるい。

291 下問侍従法橋頼純

点加筆連哥師紹巴

【はかりことにはかきりもそなき  
関戸をあくる夜ふかし鳥のこゑ

とふに猶うきさすらへのはて  
ふる郷の夢おとろかす須磨の波

此五もし猶あるへく候  
さしのほる山は光のほのかにて  
簾をまけは月になる空

中にはけしき人の秋風  
ちきりをきしことのはもかつうら枯て

添削を加えられた句稿であることは明白であるが、句自体からは手がかりを見出せない。極められた人名、頼純を調べてみると、天正十六年九月十六日「言経卿記」に、大村由己亭における連歌会に出座している記述がある（「連歌史論考」）。以下、天正十九年十一月八日以降の数巻の百韻に出座しており（「連歌資料のコンピュータ処理の研究」）、紹巴と同座していることが多く、句数は紹巴に及ばない。「下問」というのが適当かはわからないが、連歌に関しては紹巴の弟子筋になると思われる。この切れ自体が両名の手になるものかどうかはさておき、師の批点を仰いだものと見て不審はない。

293 連哥師專順

「のみやかよはまし 祇  
 また雪ふかき  
 春の朝あけ 順  
 風ふけはかすみし  
 山もあらはれて 沅  
 月にこえゆく  
 夜はのたつたち 長  
 うき秋は関もる 一

百韻の懐紙の切れであるが、成立年代等不明である。作者名、祇は

宗祇、順は專順であろう。沅というのは、「白妙の一重の外は梅もなし」を発句とする何路百韻で心敬と同座している宗沅なる人物があり、この人と思われる。残る一人の長は、宗長とするには時代が合わず、不明とする他はなからう。七賢時代の懐紙として、わずか四句の切れではあるが、貴重なものである。

294 牡丹花門弟宗椿

「あやしきはしらぬ所のね覚にて  
 のこりおほかる琴の緒あはせ  
 こゝろみをふく笛竹のよひのまに  
 夕へくうかふ江の水  
 雲とりはをのか葉山に又見えて」

伝称筆者宗椿については、「連歌史論考」第十一章・二 堺の連歌と主要作家に記述がある。この切れの内容については、連歌句集の切れであるが出典不明。

307 連哥師玄陳

「月  
 山のは、つらからぬ



月のゆふへかな

玄陳

発句を書いた色紙である。玄陳は玄仍の子。寛文五年正月五日没。年七十五。(「俳諧大辞典」による)

310 連哥師紹巴法眼

「三条西殿称名院殿御方於駿河府中

御興行

A 浅からぬ道は残れる夏野かな

B 絶やらぬ根や年をふる石竹

於一花堂

C 風ふれて蓮は花の車哉

富士社司にて

D 夏の日も陰をやめくる富士の雪

於宗長遺弟孝甫

E 跡までも風かうはしき扇かな

この切れは紹巴発句の書き留めである。すべて「紹巴富士見道記」に見える句であって、同書によって、永禄十年五月二十一日から、六月十二日までの作であることがわかる。DとEの句の間に、さらに何

永青文庫本「手鑑」中の連歌作品について (岩下紀之)

句かの発句があったことは「道記」に出ている。さてこのような場合、この切れと「道記」の先後関係は興味深い問題になってくるわけである。文字の異同については、両書よく一致し、Dの句が「道記」で「夏の日」となっているのが唯一の相違点である。

311 連哥師紹巴息玄仍

「花さけは霞の

うへの伊駒山 昌叱

舟のとかにも

よるなにはかた 紹巴

かたふくもをそき

日影のかねの声 恕慶

こと、ひ□へる

跡はさひしも 宗□

紹巴出座の百韻懐紙の切れである。特に言うべきことはない。

313 素眼

「心さへ花なき

程に年たけて □

なからへは又

いにしへの春 旨

隱家の山と成

てやかすむらん 兼

雲の下行

谷水のすゑ □□

素眼と極められた連歌関係の書跡は、「菟玖波集」が有名で、時代もかなり古いものが多いようである。この切れは残念ながら百韻懐紙の切れというだけで、作者名も解読困難で手がかりがない。